

アユはイキイキ、 地域ウキウキ。

四万十川自然再生事業（アユの瀬づくり事業）特集



「アユの瀬づくり事業意見交換会」に参加しました

四万十川自然再生協議会（略称：再生協）では、国土交通省の進める四万十川自然再生事業に協力しています。6月16日には、国土交通省主催の「アユの瀬づくり事業意見交換会」に、四万十川漁業協同組合連合会の皆さんとともに参加しました。

意見交換会では、自然再生事業のモニタリング調査の結果や漁協の方々が独自に行った産卵場整備などが紹介されました。また、「四万十川の大浦の産卵場付近に昔あった瀬を再生して欲しい。この付近は冬でも小魚がたくさんいる重要な場所だ」といった、長い間川を見ている漁業者ならではの意見も出されました。

せっかく再生された良好な河原に車が乗り入れることで、河原が固まってしまう問題については、再生協もこれまでに何度も乗り入れ規制を訴えてきました。今後、国土交通省と漁協、再生協が一丸となって議論を深め、対応を検討していくことになりました。

「アユが群れ、産卵する四万十川の再生」を目指す気持ちは皆同じ。今後具体的にどうしていけばよいかについて話し合うことができ、取り組みの前進が感じられた意見交換会でした。



活発な意見交換が行われました



漁協が実施した産卵場整備の様子（平成20年9月）



「再生協は市民として啓発活動などに全力で取り組みます！」と澤良木副会長



「地域の命運をかけるアユの産卵場。上流から河口まで流域みんなの川であることを認識し、協働していこう」と四万十川漁業協同組合連合会の土居会長



現地での意見交換も行われました

ご協力下さい！



河原に車で乗り入れると、ザクザクとした河原が固まってしまう、アユが卵を産めません。
四万十川を愛する皆さん、四万十川のアユを守るため、車で河原に入らないよう、ご協力をよろしくお願い致します。



落ちアユ漁の時期、河原に見られる無数のわだち

「アユの瀬づくり事業」モニタリング調査から見てきたもの （国土交通省中村河川国道事務所 調査結果）

アユは早瀬のザクザクした柔らかい「浮き石河床」に産卵します。このような「浮き石河床」では、礫表面に泥や藻類が付いておらず、礫に付着した卵がはがれ落ちにくいと考えられます。さらに「浮き石河床」では、卵が付着した砂利が次第に埋没していくため、卵が流出したり、他の魚に食べられる危険を回避することが期待できます。

調査結果からは、アユが濃密に産卵している場所では、卵が河床から10cm以上深く埋没していることがわかりました（図1）。つまり、親アユは河床の状態を判断して、卵が深く埋没する「浮き石河床」に産卵することによって、自分の子の安全を守ろうとしていることがうかがえます。

また、過去5年にわたる産卵場モニタリング調査の結果に各年の流量条件を絡めて整理すると、出水が多かった年は産卵場が拡大することがわかってきました（図2）。これは、台風などの洪水によって河床がかき乱される（攪乱）と「浮き石河床」が形成され、アユが産卵できる範囲が広がることを意味しています。見方を変えると、アユは台風による出水など自然の攪乱をうまく活かして産卵生態を進化させたといえます。

「アユの瀬づくり事業」では、自然の出水が引き起こす河床の攪乱作用を手助けすることで、アユが産卵しやすい環境を創出することを目指しています。今後の調査では、洪水後の河床の変化を追跡することによって事業効果を検証していきたいと考えています。



産み付けられたアユの卵
（白いツブツブのもの）



モニタリング調査風景
（産卵状況の調査）

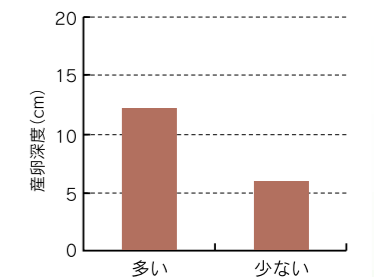


図1 卵の密度と産み付けられた卵の深さの関係（平均値）

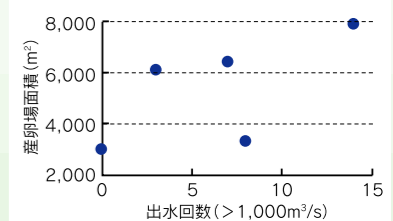


図2 出水回数と産卵場面積の関係



ザクザクとした「浮き石」状態です



礫がはまり込み、河床が固く締まっています



樹林・竹林の伐採、間伐

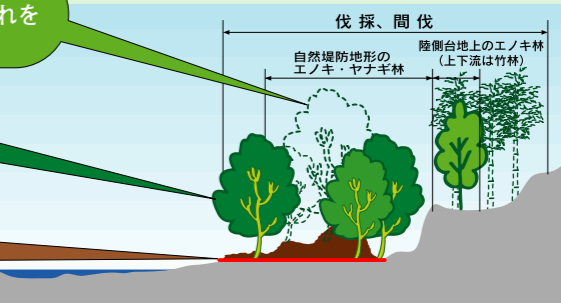
水の流れる面積を広げることで、川底の深掘れを抑制し、早瀬を回復させる。

陸域環境の保全

エノキやヤナギ林を保全することで、河川敷の生き物の生息環境の多様性を向上させる。

河原の切り下げ

洪水により河原がかき乱されやすい環境にすることで、良好な砂や小石の河原を再生する。



「アユの瀬づくり事業」のイメージ